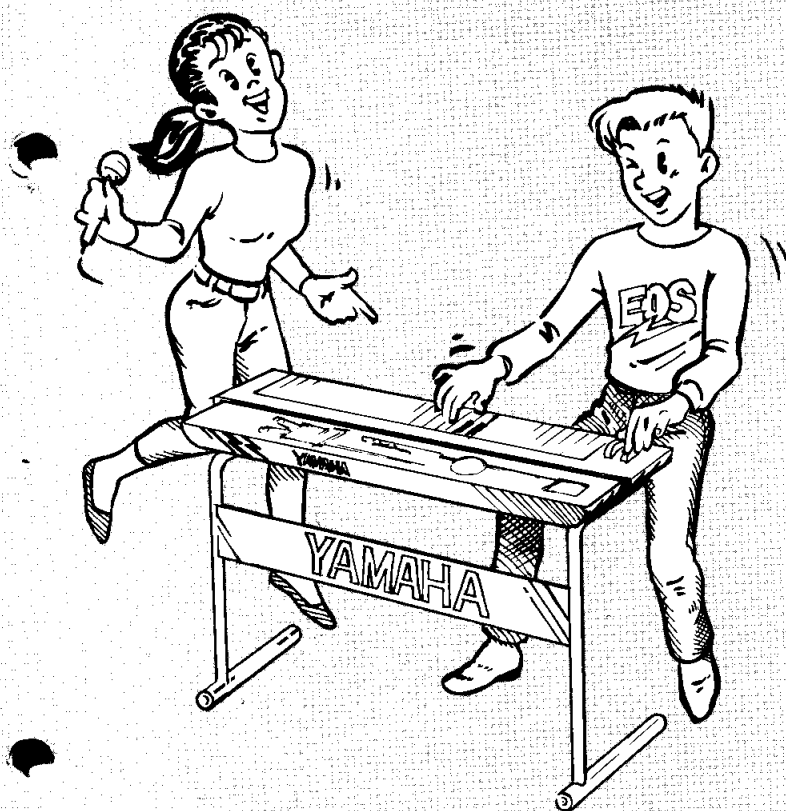


YAMAHA



EOS

YS100
DIGITAL SYNTHESIZER

取扱説明書 〈基礎編〉

はじめに

この度は、YAMAHAデジタルシンセサイザーEOSをお買い求めいただきまして、まことにありがとうございます。
EOSは簡単な操作で気軽に演奏や音づくりが楽しめる、MIDI対応のデジタルシンセサイザーです。

ヤマハ独自のFM音源を採用し、厳選されたリアルな100音色を内蔵しています。この音色をもとにして簡単な操作でオリジナル音色をつくることができます。また、同時に8つまでの音色で演奏できますから、EOS一台でアンサンブル演奏が楽しめます。

単体での使用はもちろん、他のMIDIシンセサイザーやリズムマシンなどと組み合わせても幅広くご利用いただけます。EOSの優れた機能をフルに発揮させるとともに、末永くご愛用いただくために、ご使用前にこの取扱説明書をよくお読みくださいますよう、お願いいたします。

取扱説明書の読み方

この取扱説明書は、基礎編と応用編に分かれています。お使いになる方の経験に合わせて上手にお使いください。

はじめてEOSをお使いになるときは、第1章と第2章を必ずお読みください。
 ここだけ読めばEOSの音の出し方や操作方法がわかります。
 その他の章はもう少し使いこなしたくなったときに、必要なところをお読みください

各章の終わりには、その章のまとめを載せてあります。まとめを読めばEOSの概要を理解できます。ある程度使い込んでからも、ちょっとした手引になります。

	表 題	主 な 内 容	はじめてEOSをお使いになる方	ある程度使いこなしている方
基 礎 編	第1章 準備編	EOSを使う上で知っておいて欲しいことや、接続のしかたについて説明します。	必ずお読みください。	特にお読みになる必要はありません。
	第2章 音を出してみましょう	音の出しかた、音色の選びかたについて説明してあります。	必ずお読みください。	特にお読みになる必要はありません。
	第3章 音色のエディットに挑戦	音色を変更して自分だけの音色をつくる方法を説明しています。	自分で音を作りたくなったら、お読みください。	必要に応じてお読みください。
	第4章 音色の保存	自分だけの音色を保存する方法を説明しています。	自分で音色をつくったときには、必ずお読みください。	必要に応じてお読みください。
	第5章 カードの使い方	音色をカードに保存したり、カードの音色をコピーするなど、カードの使いかたについて説明してあります。	必要に応じてお読みください。	
応 用 編	第6章 スプリット、マルチ音色の演奏	いくつかの音色を組み合わせ、演奏する方法について説明してあります。	もう少し使いこなそうと思ったらお読みください。	必要に応じてお読みください。
	第7章 音色の完成を目指そう！	音色の細かな設定やコントロールの機能について説明してあります。	必要に応じてお読みください。	
	第8章 MIDIについて	MIDIについての基本知識を解説しています。またMIDIの設定についてもここで説明します。	MIDIについて知りたくなったときにお読みください。	必要に応じてお読みください。
	第9章 資料編	音色リスト、トラブルの対処法、索引などをまとめてあります。	必要に応じてお読みください。	

EOSの特徴をご紹介します

操作性を追求した ニューデザイン

扱いやすく覚えやすいレイアウト、音づくりのしやすさを追求したニューデザインです。

イニシャルタッチ付き キーボード

鍵盤を弾く強さで音量や音色をコントロールできます。
5オクターブ61鍵盤ですから、ポピュラーからクラシックまで幅広く演奏できます。

リアルなFM音源方式

ヤマハ独自のFM音源方式を採用していますので、リアルでクリアなサウンドを楽しめます。

すぐに使える100音色を 内蔵

厳選された100音色を内蔵しています。内蔵音色はピアノから弦楽器、管楽器、効果音にいたるまで幅広く用意されています。どの音色もすぐに使用できる高クオリティです。

イージーエディット機能で オリジナル100音色

内蔵音色をもとにして簡単な操作でオリジナル音色をつくれます。自分でつくった音色は100音色まで本体内に保存できます。

カードスロットを内蔵

オリジナル100音色をカードに記憶できます。また音色ライブラリーカードも続々と発売予定です。内蔵音色、ユーザー音色（本体内のオリジナル音色）と合わせれば、300音色を瞬時に呼び出せます。

高品位のデジタルエフェクト を内蔵

リバーブ、ディレイ、ディストーションなど本格的なデジタルエフェクトを内蔵しています。コンサートホールで演奏しているような残響を得たり、音に広がりや臨場感をつけられます。

多彩な演奏表現スプリット、 マルチモード

2音色を使つてのスプリット演奏、最大で8音色を組み合わせるマルチモードを装備しました。1台でアンサンブルなど多彩な演奏ができます。

豊富なMIDIコントロール

外部MIDI楽器を使つての演奏や音色のデータの設定や転送もできます。

DX、TXシリーズとデータの 互換性

ヤマハDX21、27、27S、100、V2、TX81Zと音色データの一部に互換性があります。これらの機種とMIDIケーブルを使つて音色データのやりとりができます。

使用上のご注意

EOSは精密な電子機器です。末永くお使いいただくために、次のことに注意して、大切に扱ってください。

極端な温度、湿気、日射にご注意ください

直射日光の当たる場所、湿気の多い場所、冷房装置の近くなど、極端な温度、湿度の場所、ホコリの多い場所でのご使用や保存は避けてください。

落としたり、強いショックを与えないでください

強い衝撃を与えますと、故障の原因となりますので十分ご注意ください。
また本機を持ち運ぶときには、特に鍵盤・スイッチなどを保護してください。
電源コードや接続コードはすべてはずしてください。
キー・スイッチ・入出力端子に無理な力を加えないでください。

本機内部に異物が入らないように

鍵盤のすきまなどから、異物、特にヘアピン、針、硬貨等、金属物およびジュースやコーヒーなどの水分が入らないようにご注意ください。感電や故障の原因となります。

中を開けないように

本機は精密な電子部品で構成されています。内部を不用意にさわりますと故障や事故につながりますので、絶対に中を開けないでください。また改造はしないでください。改造された後の保証はいたしかねます。

接続について

再生するスピーカーなどの破損を防ぐため、コードの接続は、必ず全ての機器の電源を切ってから行なってください。コード部分の断線やショートを防ぐために、コード類の接続は必ずプラグ部分を持って抜き差ししてください。

お手入れについて

汚れなどのお手入れは、柔らかな布で乾拭きしてください。ベンジンやシンナーなどの化学薬品で外装を拭いたり、近くでエアゾールスプレーを散布しないでください。

他の電気機器への影響について

デジタル回路を多用しているため、ごく近くでラジオやテレビなどをご使用になりますと、ラジオやテレビ側で雑音などが生じることがあります。なるべく離してご使用ください。

バックアップバッテリーについて

本体に記憶させたユーザー音色などのデータは、電源を切っても内部の電池により約5年間保護されています。ユーザー音色を選んだときにディスプレイに「BT」というメッセージが表示されたら、電池の寿命が近づいています。電池の寿命がくると、ユーザー音色などのデータは消えてしまいます。
早めにお買上店もしくは弊社サービスセンターに電池の交換をお申し出ください。
なお、電池交換の際には、本体内のデータはすべて消えますので、大切なデータはあらかじめ別売のRAM（ラム）カードに保存しておいてください。
尚、電池の交換は有料です。

電源について

日本国内の100ボルト電源専用（50Hz、60Hz共用）です。これ以外の電源は使用しないでください。

また、長期間お使いにならないときは、電源コードをコンセントから抜いておいてください。

落雷などの恐れがある場合には、電源コードをコンセントから抜いておいてください。

消費電力の大きな機器と同じコンセントを使用したり、タコ足配線をする、音質が劣化することがありますので注意してください。

本機の電源を入れてから、アンプなどの電源を入れてください。また、アンプなどの電源を切ってから、本機の電源を切ってください。

保証書

お買い求めの際、購入店で必ず保証書の手続きを行なってください。保証書に販売店の印がありませんと、保証期間中でもサービスが有償となることがあります。保証の内容、期間などは、保証書及び、「サービスについて（103ページ）」をご覧ください。

- 本書の内容に関しては、将来予告なく変更することがあります。
- 本書の内容は、万全を期してありますが、万一ご不明な点や誤りなど、お気づきの点がございましたらご連絡ください。
- 本書の一部または全部を無断で複写することを禁じます。
- 故障、修理などによるデータの変化、消失による損害および逸失利益については、当社では一切その責任を負えませんので、あらかじめご了承ください。
- 本書および本機の使用により生じた損害、逸失利益または第三者からのいかなる請求についても、当社では一切その責任を負えません。あらかじめご了承ください。

基礎編目次

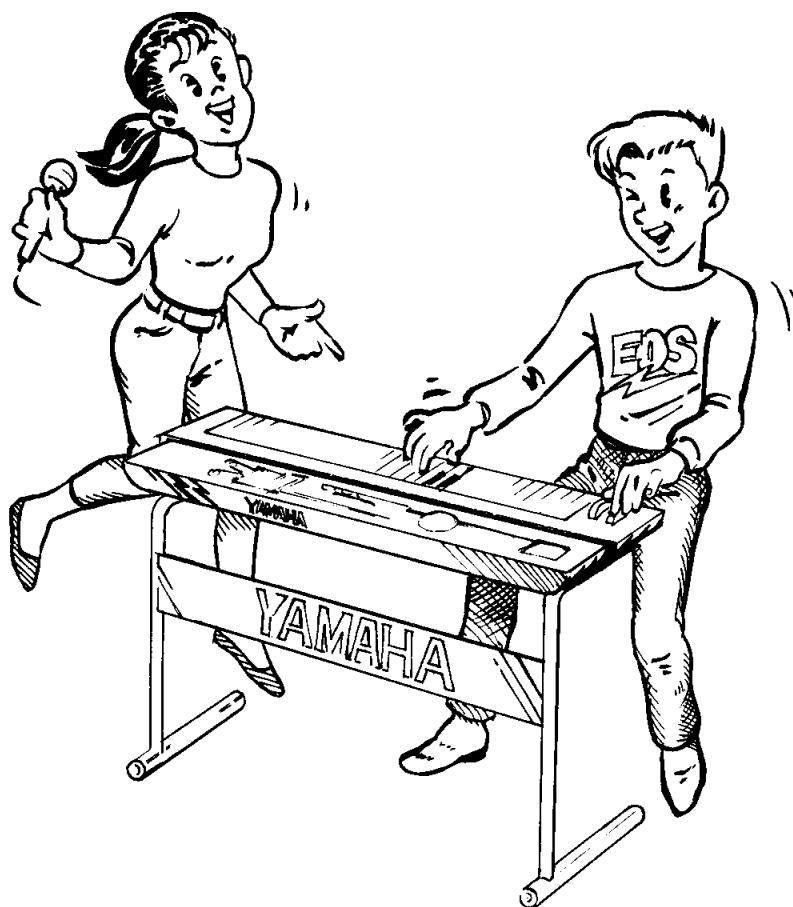
はじめに	1
取扱説明書の読み方	2
EOSの特徴をご紹介します	3
使用上の注意	4
目次	6
第1章 準備編	9
各部の名前とそのはたらき	10
接続のしかた	14
アンプやヘッドホンのつなぎかた	14
キーボードアンプを接続する場合	14
ステレオ（またはラジカセ）を接続する場合	14
ミキサーやMTR（マルチトラックレコーダ）と接続する場合	15
ヘッドホンを接続する場合	15
目的に合わせたつなぎかた	16
テープと合わせて演奏するとき	16
演奏をカセットテープに録音するとき	17
ボリュームペダル、サステインペダルのつなぎ方	19
MIDIのつなぎ方	19
スタンド	19
第2章 音を出して見ましょう	21
電源の入れかた	22
電源を入れる	22
音は出るかな	23
音色の呼び出し方	24
EOSの音色は大きく分けて次の三種類があります	24
EOSはオーケストラ /	24
プリセット音色の呼び出し	25
音色の切り換え+、-キーで選ぶ	25
テンキーで選ぶ	26
ユーザー音色の呼び出し	26
カード音色の呼び出し	27
弾き方で音量と音色を変えよう//	29
イニシャルタッチ	29
楽器らしさを出そう//	30
ピッチベンドホイール	31
モジュレーションホイール	31
チューニングと移調	33
チューニング	33
移調（ノートシフト）	34
今流行りのウラ技	35
音色呼び出しのウラ技集	35
この章のまとめ	36
デモ演奏を聴いてみよう	37

第3章 音色のエディットに挑戦	39
エディットってなんだ！？	40
エディットとは	40
エディットの手順	41
もとにする音色を呼び出す	41
エディットの入口	41
エディットのしかた	42
エディットの前に3つの注意事項	43
エディットの出口……ストア (STORE) とエクジット (EXIT)	43
音の出方や消え方を変える	44
音の出方や消え方	44
EGのエディット	45
音の出始め (アタック) を変える	45
音の減衰 (ディケイ=Decay) を変える	46
リリース (余韻) を変える	46
びっくりマーク (/) にびっくり /	47
EGって何だろう… (vol+tone、volume、tone)	48
音の明るさを変える	49
音の明るさや輝きを変更します	49
音の明るさを変える (ブリリアンス)	49
音の輝きを変える (ウェーブ)	49
何が起こる？ Input-4Nos1	49
データの変更の仕方+、-とテンキーの使い方	50
データ変更のしくみ	51
もとの音色にもどすには (EXITスイッチ)	51
もとの音色と比較する (コンペア COMPARE)	51
ビブラートやトレモロの設定	53
LFO (エルエフオー)	53
ビブラートのかかり具合 (深さ) を変える (Vibrato)	53
トレモロのかかり具合 (深さ) を変える (Tremolo)	54
ビブラートやトレモロの速さを変える (Speed)	54
音色に名前をつけよう	55
音色に名前をつける (NAME)	55
鍵盤で名前をつける	55
「My Voice #1」に命名	56
訂正のしかた	57
もとの音色名の一部だけを変更したい場合	57
残響効果をつける	59
エフェクトってなんだ？	59
残響 (リバーブ)	59
山びこ効果 (エコー)	59
ディストーションとゲイト	60
エフェクト効果	60
エフェクトの種類を選ぶ (Preset)	60

	タイム (Time) を変える	61
	バランス (Balance) を決める	62
	迷ったらEXITスイッチを押そう	63
	この章のまとめ	64
第4章	音色の保存	65
	音色の保存 (ストア)	66
	保存とはどういうことか?	66
	保存の手順	68
	保存のしかた	68
	保存するメモリーを決める (ユーザーとカード)	68
	メモリープロテクトを解除する	69
	音色を保存する (ストア)	69
	ストア (STORE) の中止	71
	この章のまとめ	72
第5章	カードの使い方	73
	カードの種類 (ROMカードとRAMカード)	74
	ROM (□△) カード	74
	RAM (ラム) カード	74
	カードの寿命と取り扱い	74
	カードのフォーマット	76
	フォーマットのしかた	76
	1音色の保存 (カードへのストア)	78
	1音色の保存 (カードへのストア)	78
	RAMカードにストアしよう	
	RAMカードの準備	79
	保存 (ストア) の操作	79
	ストア (STORE) の中止	81
	100音色の保存 (カードへのセーブ...To Card)	82
	セーブってなんだ	82
	セーブの手順	
	RAMカードの準備	83
	セーブの操作	83
	100音色の呼び出し (EOSへのロード...From Card)	85
	ロードってなんだ	85
	ロードの手順	
	ロードの準備	85
	ロードの操作	86
	この章のまとめ	88
付録	89
	プリセット音色一覧	90
	故障かな?と思ったら	93
	エラーメッセージが表示されたら	96
	索引 (50音順)	98
	索引 (アルファベット順)	102
	サービスについて	103

第1章 準備編

この章では、EOSの各部の名称の紹介から、
他の機器との接続法について解説しています。
とにかくまず、お読みください。



各部の名前とそのはたらき

ここでは、EOSを使うために必要なスイッチ類のよびかたとその機能について簡単に説明します。

フロントパネル

カード挿入口 CARD

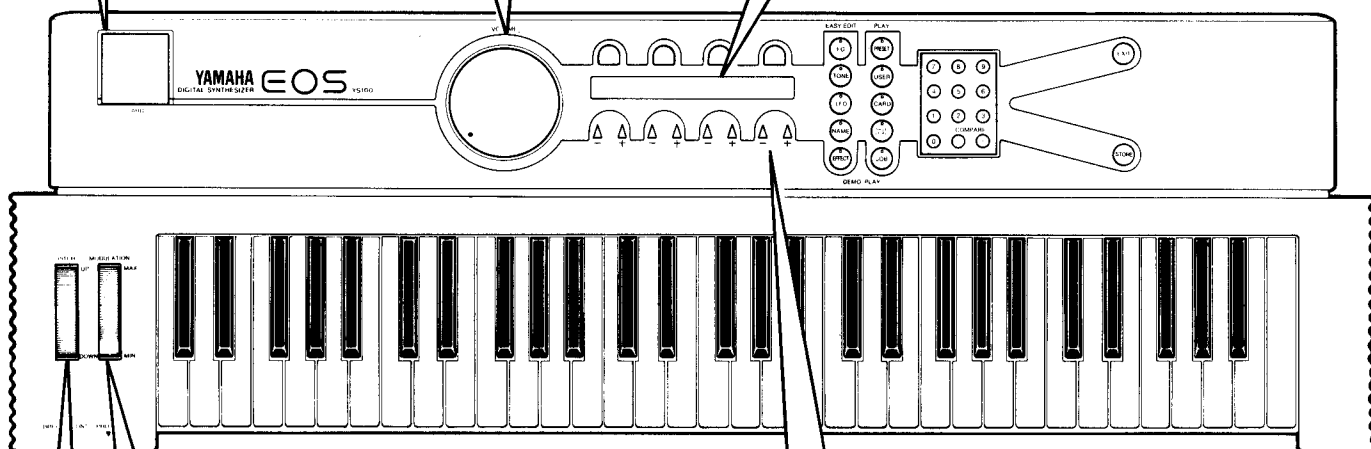
カード（RAMカードやROMカード）を差し込みます。カードはご自分でつくった音色や演奏データを保存したり、呼び出したりするために使います。（カードは別売です）（→27ページ）

ボリューム Volume

全体の音量を調節するつまみです。大きく設計してあるので微妙な音量設定をすることができます。一番左に回すとゼロになります。（→23ページ）

ディスプレイ

選択している音色の番号や名前、その他のデータやEOSからのメッセージなどの情報を見やすく表示します。照明付きですから、暗いステージでの演奏でもはっきりと確認できます。（→25ページ）



モジュレーションホイール MODULATION

ビブラート（音程のゆれ）などを表現するときに使います。上に動かすほど効果が大きくなります。手前の位置では効果がかりません。（→31ページ）

データエントリーキー +、-

音色を呼び出したり、機能を選択するときに使います。また、設定を指定するときにも使用します。（→25ページ）

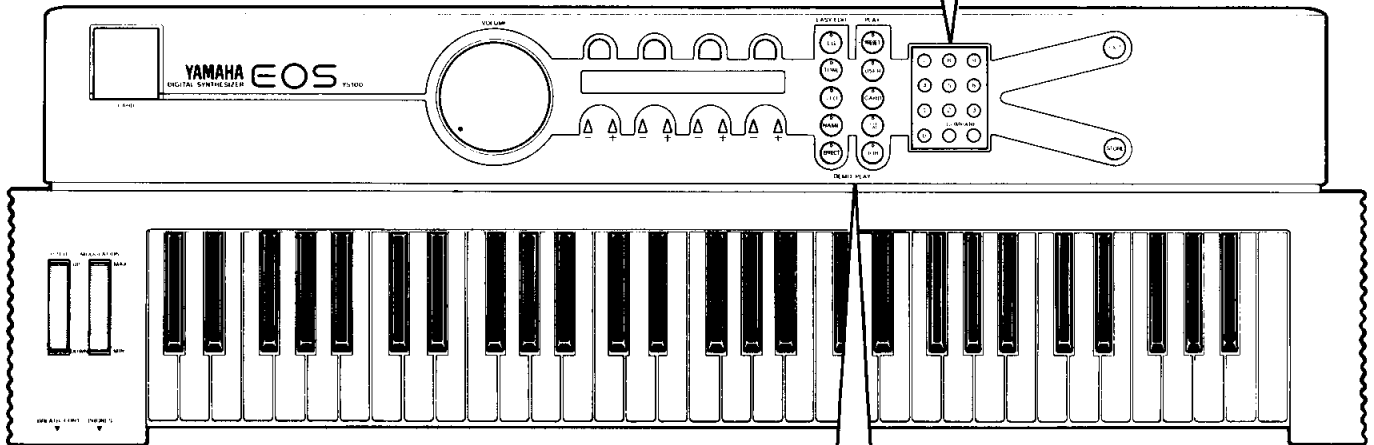
ピッチベンドホイール PITCH

弾いている音の音程を上下させることができます。手を離すと中央の正しい音程にもどる仕組みになっています。上に動かすほど音程が高くなり、下で低くなります。（→31ページ）

テンキー 数字キー +、-

数字キーは音色番号や、設定値などを指定するときに使います。

+、-キーは押す度に設定値がひとつずつ変わります。両方同時に押すと、変更前の音色を呼び出すこともできます。(→26ページ)



ヘッドホン接続端子 PHONES

ステレオヘッドホンを接続する端子です。
(ヘッドフォンは別売です。)(→15ページ)

ブレスコントローラ接続端子 BREATH

息を吹き込む強さで、音量や音程を変化させるブレスコントローラを接続する端子です。

(ブレスコントローラは別売です。)

(→応用編36ページ)

デモ演奏スイッチ DEMO PLAY

「EFFECT」と「JOB」スイッチを同時に押すとデモ演奏を聴けます。

EOSの高品位なサウンドとトータルな魅力をすぐに体験できます。(→37ページ)

エディットスイッチ EG、TONE、LFO、NAME、EFFECT

音色の変更（エディット）や、音色にエフェクトをかけたり、音色に名前を付けるときなどに使います。

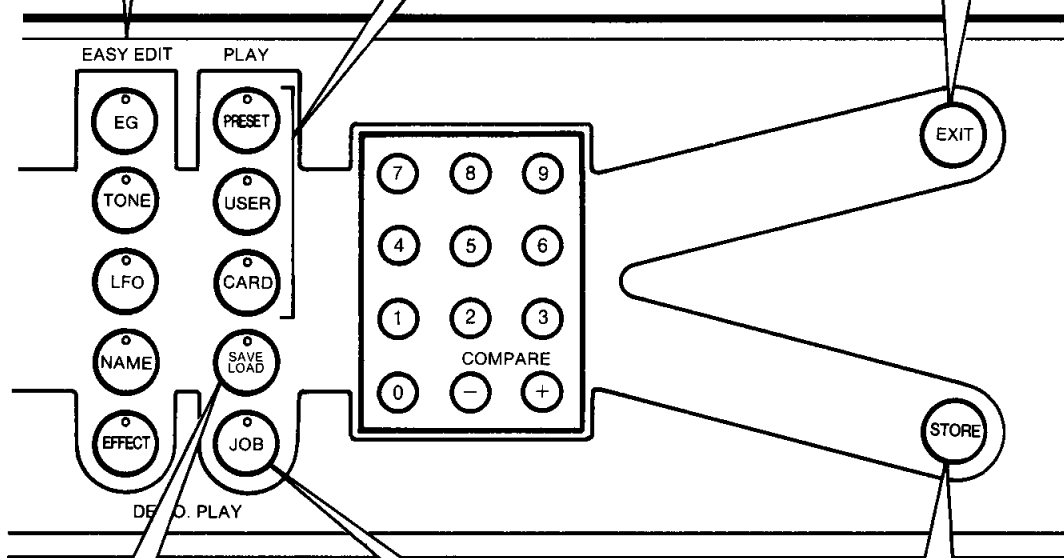
（→41ページ）

プレイスイッチ PRESET、USER、CARD

音色を呼び出すときに使います。本体に内蔵されている音色（プリセット）を使うか、自分で作成した音色（ユーザー）を使うか、カードの音色（カード）を使うかを選択します。（→25ページ）

エクジットキー EXIT

いつでもプレイ状態にもどる非常脱出スイッチです。操作の途中でわからなくなったらこのキーを押してください。（→63ページ）



セーブ/ロードキー SAVE、LOAD

自分でつくった音色をカードに記憶させたり、カードに記憶してある音色を使うときに使用します。

（→73ページ）

ストアキー STORE

新しくつくった音色を保存するときに使います。（→68ページ）

ジョブキー JOB

複数音色の演奏や音色の細かな変更をするときに使います。（→応用編6ページ）

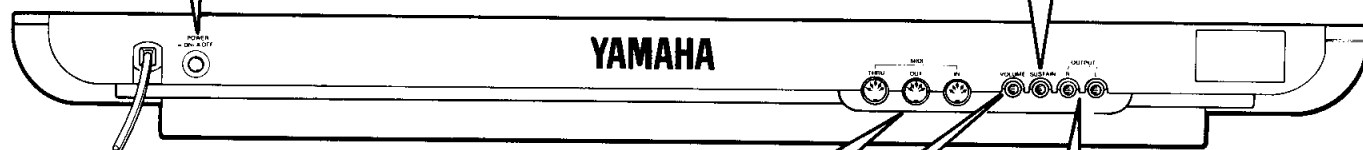
リアパネル

電源スイッチ POWER

電源スイッチです。押し込んだ状態がONになり、もう一度押すと手前に出た状態でOFFになります。
(→22ページ)

サステインペダル接続端子 SUSTAIN

鍵盤を離したあとでも音を伸ばすサステイン効果をつけるサステインペダルを接続する端子です。
(サステインペダルは別売です。)(→19ページ)



MIDI端子 MIDI IN MIDI OUT MIDI THRU

MIDI規格のケーブルを接続する端子です。
MIDIケーブルを使って他のMIDI機器と接続します。
(MIDIケーブルは別売です。)(→応用編40ページ)

出力端子 OUTPUT L R

音の出口です。キーボードアンプなどを接続します。
(接続ケーブルは別売です。)(→14ページ)

ボリュームペダル接続端子 VOLUME

音量を足元でコントロールするためのボリュームペダルを接続する端子です。
(ボリュームペダルは別売です。)(→19ページ)

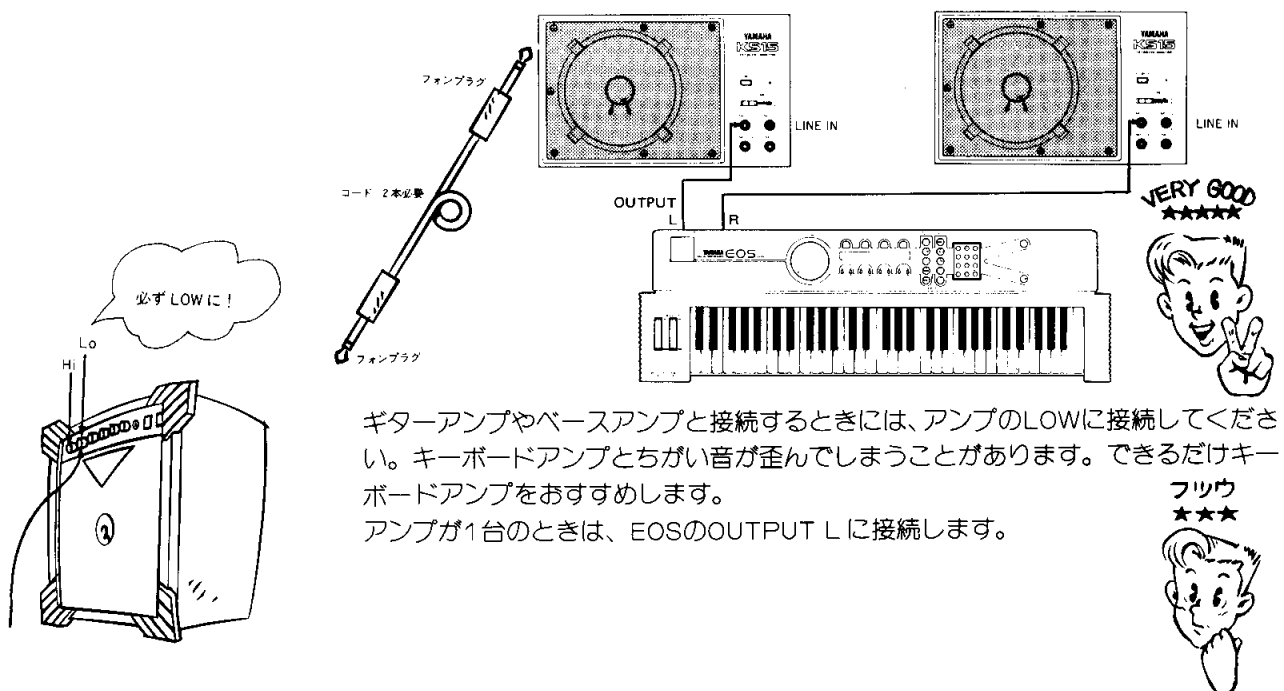
接続のしかた

アンプやヘッドホンのつなぎかた

EOSはスピーカーを内蔵していません。音を出すにはキーボードアンプなどの音響機器を接続しなければなりません。ただし、ヘッドホンを使えばアンプを接続しなくても演奏を楽しめます。ここでは一般的ないくつかの例を紹介します。

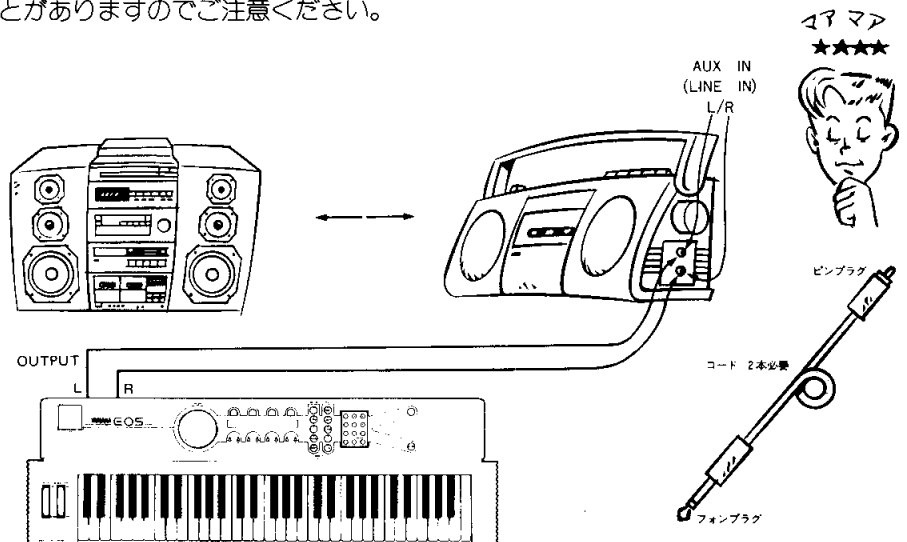
キーボードアンプを接続する場合

2台あればステレオで楽しめます。よい音で演奏するにはキーボードアンプ(ヤマハKSシリーズ)などが適当です。EOSの出力端子OUTPUT L、Rをキーボードアンプの入力端子LINE INに接続します。



ステレオ(またはラジカセ)を接続する場合

EOSの出力端子OUTPUT LRとステレオ(またはラジカセ)の入力端子AUX IN(またはLINE IN)のLRを接続します。あまり大きな音を出すとスピーカーを傷めることがありますのでご注意ください。

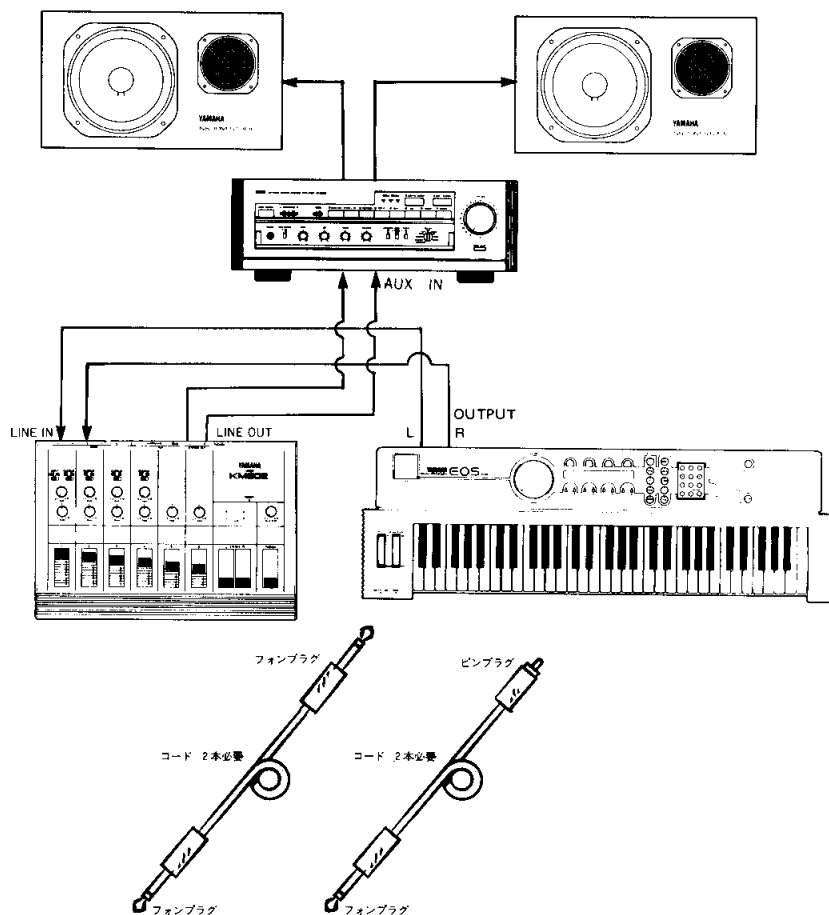


ミキサーやMTR(マルチトラックレコーダー)を接続する場合

EOSの出力端子OUTPUT LRをミキサーやMTRの入力端子LINE INに接続します。ミキサーのゲインは、LINEまたは-20dBにセットします。パンは、L/R左右いっぱいに振り分けます。

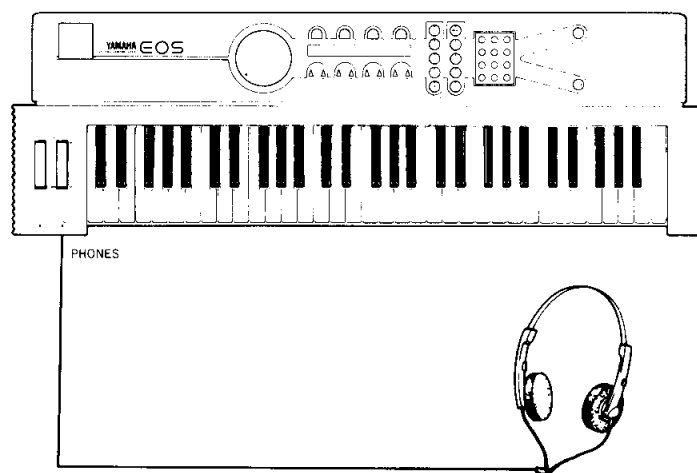
ミキサーのLINE INの端子によって接続ケーブルが異なります。

リズムマシーンや他のシンセサイザーなどといっしょに演奏するには最適です。



ヘッドホンを接続する場合

リアパネルの接続端子類にはヘッドホンをつながないでください。

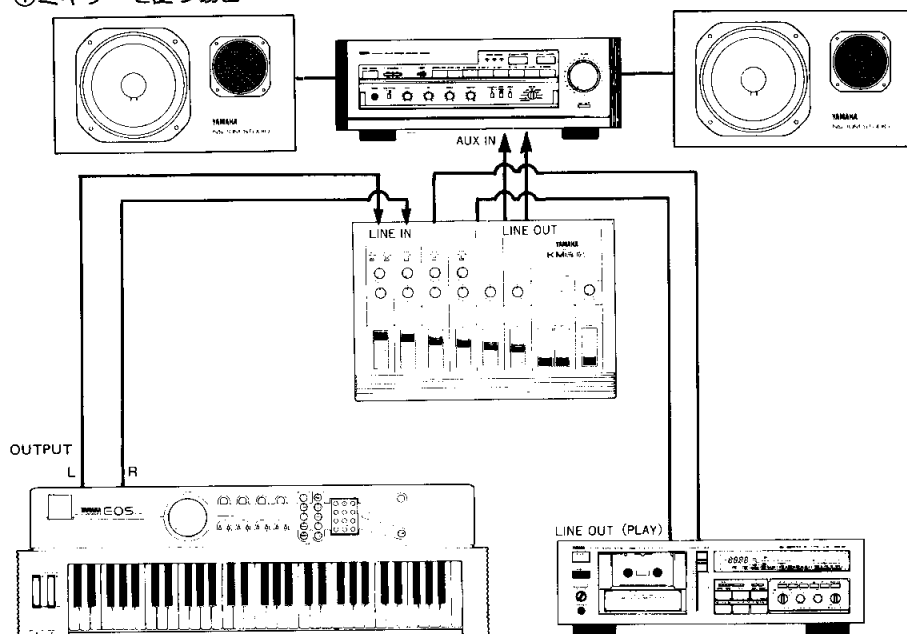


目的に合わせてつなぎ方

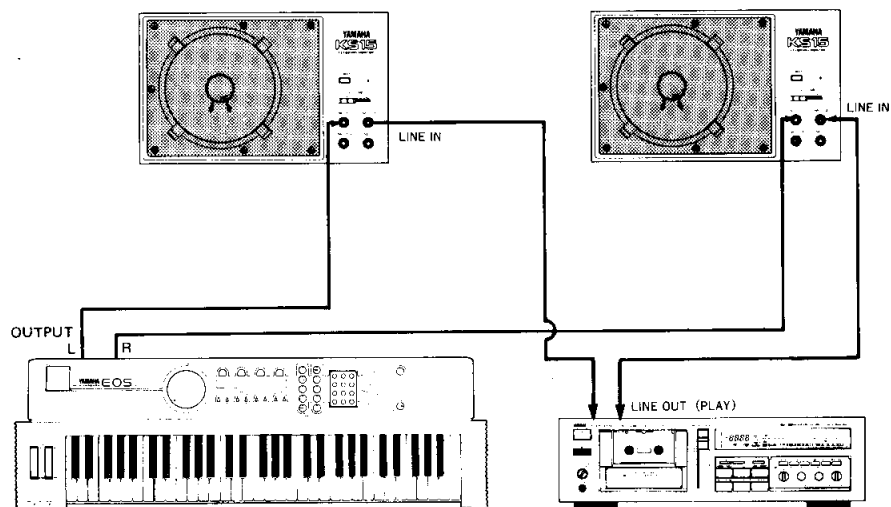
テープと合わせて演奏する
とき

ミキサーか、入力端子のたくさんあるキーボードアンプが便利です。

①ミキサーを使う場合

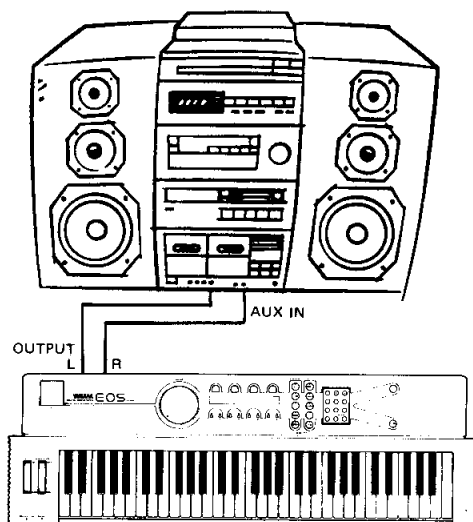


②キーボードを使う場合

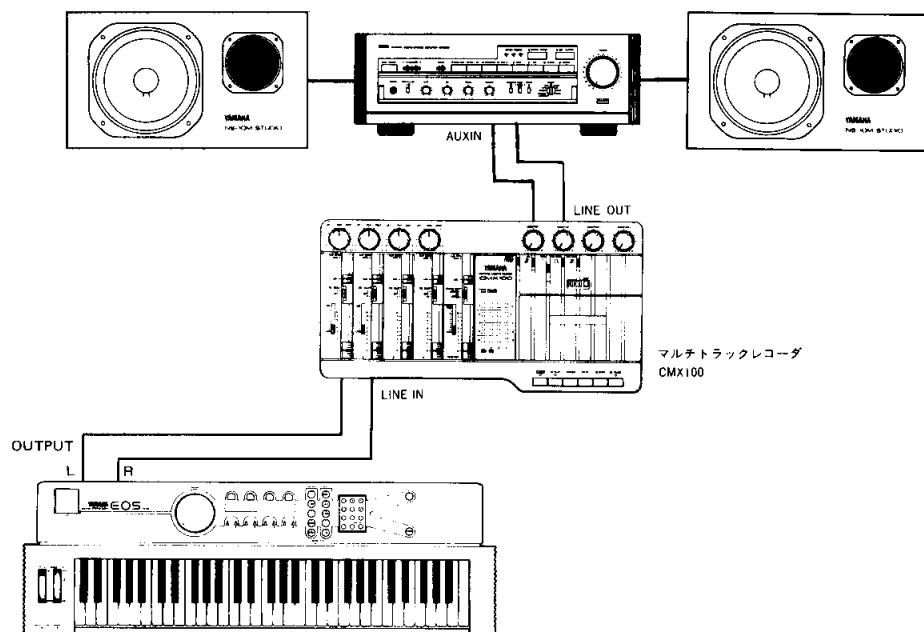


演奏をカセットテープに 録音するとき

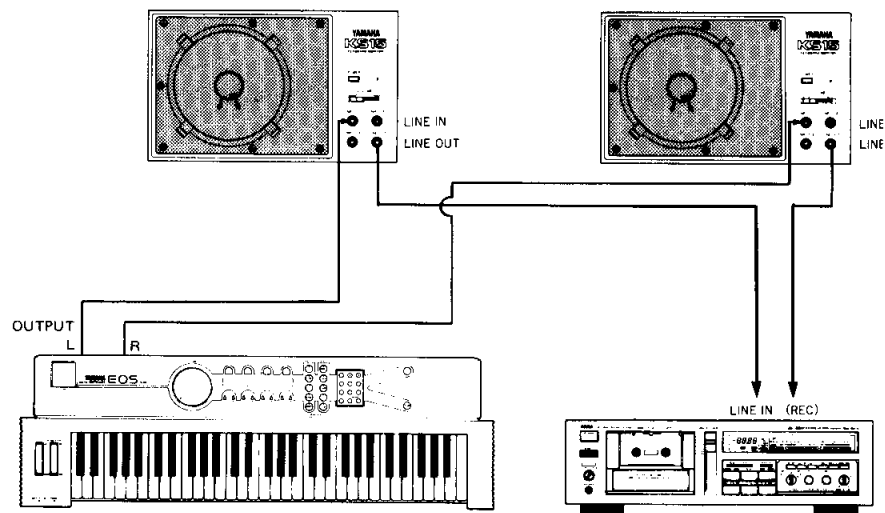
①家庭用のオーディオセットを使う場合



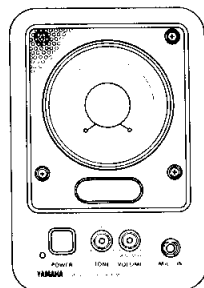
②マルチトラックレコーダを使う場合



③キーボードアンプを使う場合



このように使い方によっていろいろな接続方法があります。手持ちのステレオやラジカセ、アンプでも十分楽しめます。ヤマハキーボードアンプKS15やモニタースピーカーMS101ならテープと合わせて演奏したり、他の楽器と合奏したりすることができます。また演奏もカセットテープなどに録音できますから大変便利です。



推奨モデル

ヤマハキーボードアンプ KS10、KS15、KS35

ヤマハモニタースピーカー MS101

その他のアンプやデッキ、ミキサーなどでもLINE IN、AUX INといった入力端子のあるものを使用してください。

アンプと合わない場合、音が歪んだり、音が小さくなったりすることがありますので、なるべくキーボードアンプのご使用をおすすめします。

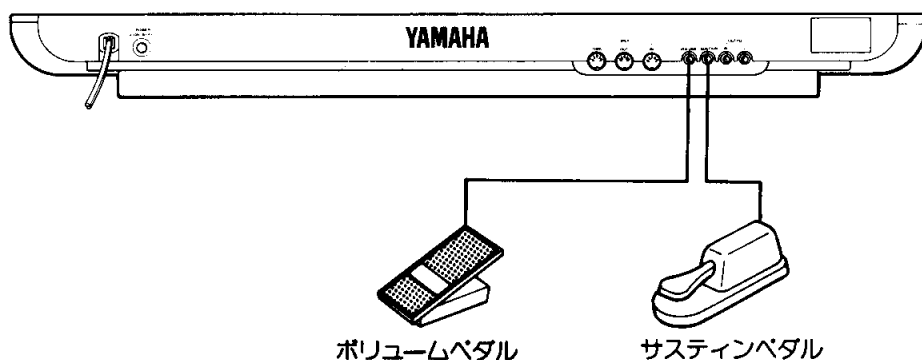
マイク端子には絶対に接続しないでください。

接続は、それぞれの機器に付属の説明書をご覧になって専用のケーブルで接続してください。

EOSは、ステレオ出力端子を持っています。2台のアンプ（スピーカー）を接続すれば臨場感のある音が楽しめます。

アンプ（スピーカー）が1台のときはEOSの出力端子OUTPUT Lに接続します。

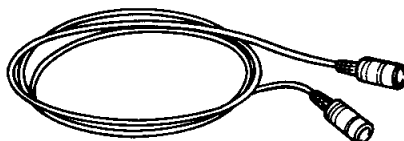
ボリュームペダル、 サスティンペダルの つながりかた



ボリュームペダルには、ヤマハフットコントローラFC7、サスティンペダルにはヤマハフットコントローラFC4またはFC5をご使用ください。
これ以外のコントローラは正確に動作しない場合があります。

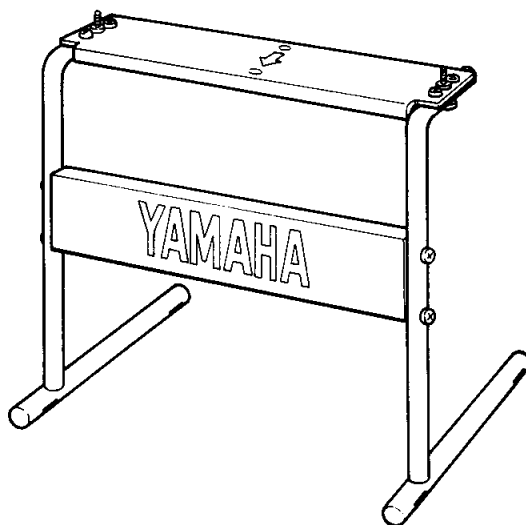
MIDIのつながりかた

EOSはMIDI端子を装備したシンセサイザーやリズムマシンとつないで、同期演奏などができます。接続は専用のMIDIケーブルを使用してください。MIDIの使い方は「MIDIについて」(応用編)で詳しく説明します。



スタンド

机などの上に置いてもよいのですが、できるだけ専用スタンドをご使用ください。
スタンドは別売キーボードスタンドLG-8お使いください。



第2章 音を出してみよう

いよいよ実際に音を出すときがきました。
もう一度練習の技術を確認してください。



電源の入れ方

電源を入れる



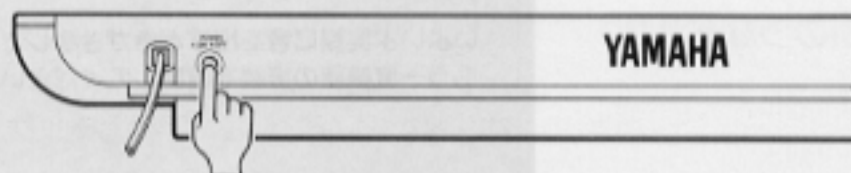
まず次のことを確認してください。

1. すべての機器の電源がオフになっていますか。
2. 各機器の電源ケーブルは正しくコンセントに差し込まれていますか。
3. すべての機器の接続は正しいですか。
4. アンプのボリュームはゼロまたはMin. になっていますか。
5. EOSのボリュームは一番左の位置になっていますか。

※カードを使うときは、カードを装着口に差し込んでおいてください。(27ページ)

①EOSの電源スイッチをオンにします。

本体右後ろのスイッチを押し込んだ状態が、パワーオンです。



どうですか？ ディスプレイやスイッチのランプなどが点灯しましたか？
点灯しない場合は、再度コンセント、スイッチなどを確かめてください。
ディスプレイは次のように表示されます。

```
===== < Y A M A H A > =====  
===== Digital Synthesizer # YS100 =====
```

しばらくするとこのように変化します。

PLAY) PRESET VOICE		Tuning	Note shift
No.00	Elegant	+00	+00

※音色番号や音色名はこのとおりにならない場合もあります。

②アンプ（ステレオやラジカセなど）の電源スイッチをオンにします。

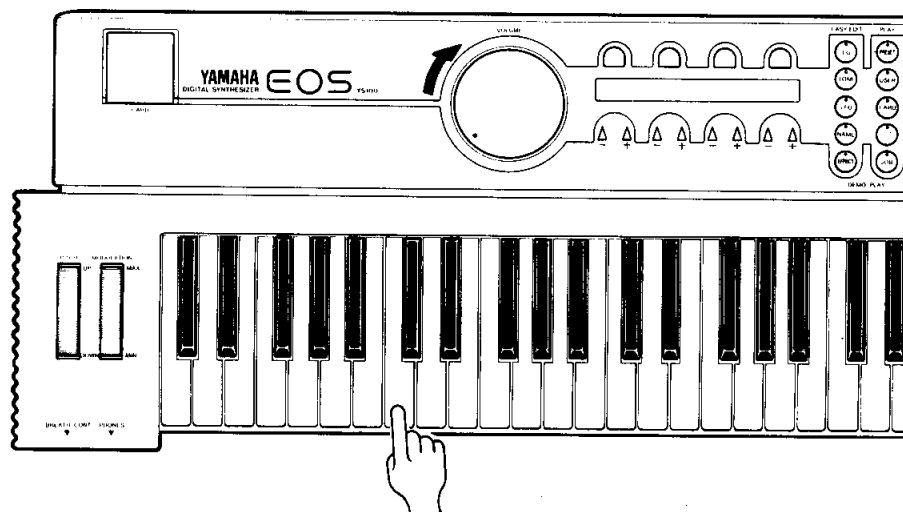
必ずEOSの電源を先にオンしてから、音の出口（アンプ）の電源をオンにします。
アンプの電源を先にオンにすると、EOSの電源をオンにしたときに「プチッ」というノイズが入り、アンプやスピーカを傷めることになります。

●電源を切るときはアンプ→EOSの順でオフにします。

音は出るかな

では、いよいよ音を出してみましょう。

1. アンプのボリュームを少し上げます。
2. EOSのボリュームを少し右に回します。



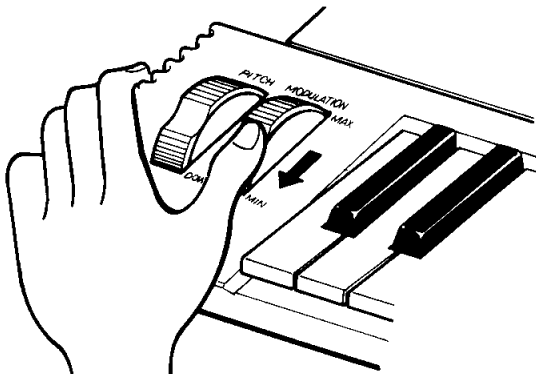
鍵盤を弾いてみてください。

音は出ましたか。聴きやすいようにボリュームを調整してみてください。

音色は内蔵されている100種の内の1つが選ばれています。

注意

モジュレーションホイールのくぼみが手前まで下がっていることを確認してください。モジュレーションホイールが上がっているとおかしい音になります。



もし音が出なかった場合は、接続をもう一度確認してください。ヘッドホンを接続して音が出るときには、接続コードやアンプ、スピーカーの接続、ボリュームを確認してください。

音色の呼び出し方

EOSの音色は大きく分けて次の三種類があります

1. プリセット音色

EOSに初めから内蔵されている音色で100種類あります。
この100音色はどんな操作をしても決して消えません。

2. ユーザー音色

皆さんが自分でつくる音色です。100種類まで記憶できます。
音色のつくり方と記憶のさせ方は「音色のエディットに挑戦」(39ページ)、「音色の保存」(65ページ)をご覧ください。
(お買い上げの時点では、プリセット音色と同じ音色が入っています)。

3. カード音色

カードに入っている音色です。1枚のカードには100音色まで記憶できます。
カードにはROM(ロム)カードとRAM(ラム)カードの2種類があります。
ROMカードの音色は決して消えることはありません。
RAMカードには皆さんがつくった音色を記憶できます。音色のつくり方と記憶のさせ方は「音色のエディットに挑戦」(39ページ)、「カードの使い方」(73ページ)をご覧ください。
(ROMカード、RAMカードは別売りです)。

EOSはオーケストラ！

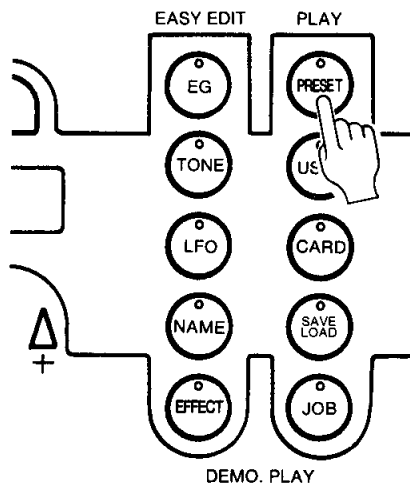
お買い上げの時点ではプリセットの100音色がすぐに使えます。
(ユーザー音色にはプリセット音色と同じものが入っています。カードは別売りです)
プリセットの100音色には、ピアノやオルガンなどの鍵盤楽器から、ギターやベース、そしてバイオリン、チェロ、フルート、ピッコロ、トロンボーン、トランペット、ハーモニカ、パーカッション、コーラス、三味線や効果音……などなどあらゆるジャンルの音色が揃っています。
ロックバンドも、民謡や演歌、ポップス、クラシックまで幅広い音楽にすぐに使えます。
あなたは100人のオーケストラのメンバーを揃えたのです。オーケストラの名前はEOSグランドオーケストラ！
別売のカードを使えば200人、300人……ウーン気が遠くなりそう。でも夢が広がりますね！！



それではEOSグランドオーケストラのメンバーをひとりずつ呼び出してみよう。
まずはプリセット音色の呼び出しです。

プリセット音色の 呼び出し

EOSに初めから内蔵されている100音色（プリセット音色）を使って音を出してみよう。



PRESETを押します。

PRESETの赤いランプが点灯し、ディスプレイは図のように変わります。

「PRESET」（プリセット）音色を選んでいきます。

PLAY) PRESET VOICE		Tuning	Note shift
No.00	Elegant	+00	+00

選んだ音色の番号です。 選んだ音色の名前です。
0～99まであります。

鍵盤を弾きながら、アンプのボリューム、EOSのボリュームで弾きやすい音量に調整してください。

音色の切り換え +、-キーで選ぶ

次に音色を変えてみましょう！

プリセット音色はNo. 00～99までの100種類あります。
その中から希望の音色を選びます。

ディスプレイの下に4組ある+、-キーのうち、一番左の+、-キーを押してみてください。

PLAY) PRESET VOICE		Tuning	Note shift
No.10	SoftString	+00	+00



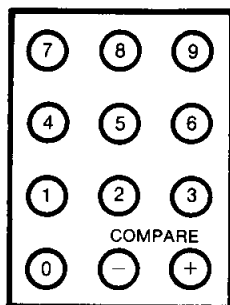
ディスプレイの音色番号と音色名がひとつずつ変わります。

この例ではプリセット音色の10番の「Soft String」という音色が選ばれています。
+、-キーを押し続けると連続的に音色が切り換わります。

鍵盤を弾きながらいろいろ試してみてください。

* プリセット音色の内容は90ページをご覧ください。

テンキーで選ぶ



テンキーで音色番号を指定して呼び出すこともできます。00～99までの2ケタの数字を押します。

たとえば65番の音色を呼び出すにはまず10の位の⑥を押します。

PLAY)	PRESET VOICE	Tuning	Note shift
No.6?	SoftString	+00	+00

10の位に6が入力されました。1の位は「？」マークが表示され、1の位の入力进行っています（この時点ではまだ音色は切り換わりません）。

次に⑤を押します。

PLAY)	PRESET VOICE	Tuning	Note shift
No.65	SynBrass 4	+00	+00

1の位に5が入力され、65番の「Syn Brass4」という音色が呼び出せます。

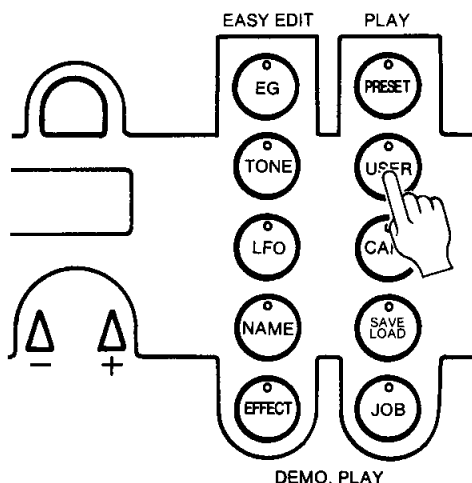
ヒトケタの番号の音色を選ぶときには、最初に0を押します。

間違って番号を押してもアワテズニ / もう一度テンキーを押し直してください。

ユーザー音色の呼び出し

ご自分でつくった音色（ユーザー音色）を使って音を出してみましょう。

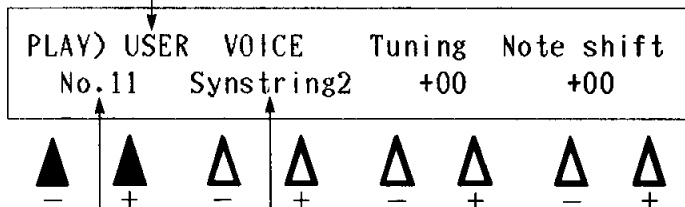
なお、お買い上げの時点では、プリセット音色と同じ音色が一時的に記憶されています。



USERを押します。

USERの赤いランプが点灯し、ディスプレイは図の様に変わります。

「USER」（ユーザー）音色を選んでいきます。



選んだ音色の番号です。
0～99番まであります。

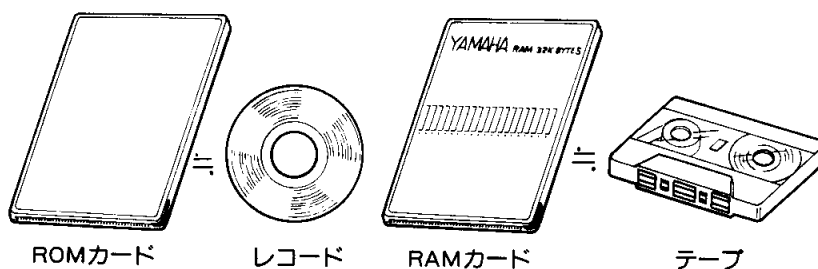
選んだ音色の名前です。

ディスプレイの下の、一番左の+、-キーで音色を切り換えます。

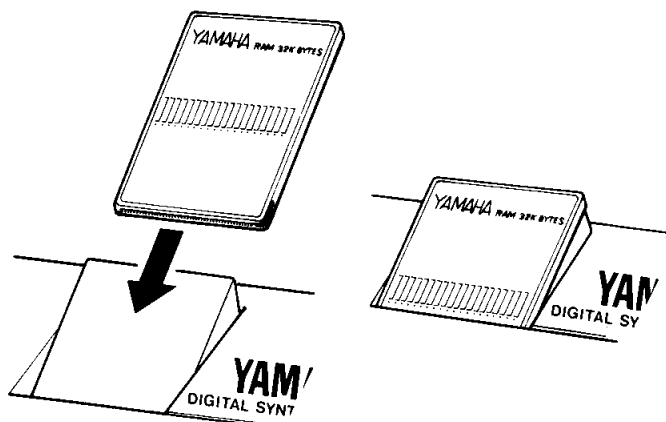
テンキーで2ケタの数値を指定しても音色を変えられます。

カード音色の呼び出し

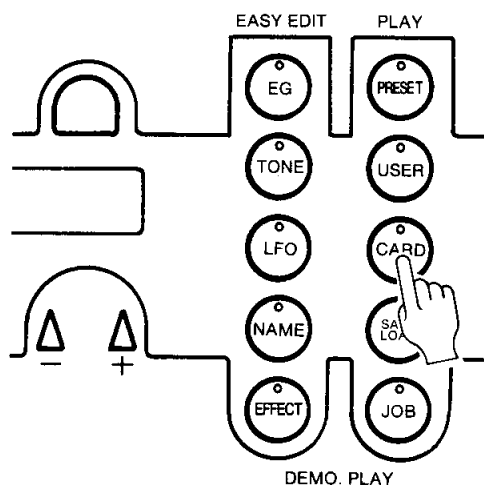
本体のプリセット音色100種、ユーザー音色100種の他に、カードの音色も使えます。カードにはYAMAHAがつくった音色の入った「ROM (ロム) カード」と、みなさんがつくった音色を記憶しておく「RAM (ラム) カード」の2種類があります。ROMカードの音色は決して消えることはありません。RAMカードは何度でも音色を消したり、別の音色を記憶できます。ROMカードは「レコード」や「CD (コンパクトディスク)」、RAMカードは「カセットテープ」と考えると理解しやすいでしょう。ROMカードとRAMカードは別売です。ROMカードは、EOS YS100/200用を、RAMカードはYAMAHA RAMカードMCD32(¥7,500)をお求めください。ここでは、カード100音色の呼び出し方を説明します。



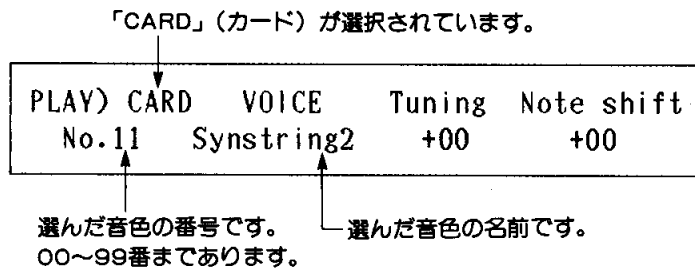
1. EOSの電源をオフにしてカードをカード挿入口に差し込んでください。
YAMAHAと印刷してある面を上にし、端子部分を挿入口に差し込みます。図のような位置までしっかり差し込んでください。



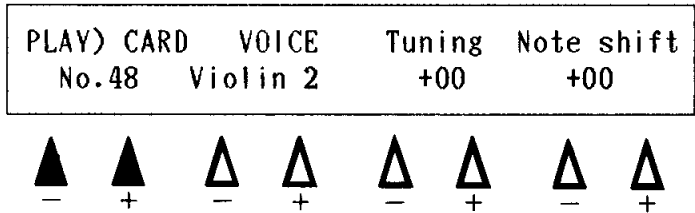
2. EOSの電源をオンにしてからCARDを押してください。



CARDの赤いランプが点灯し、ディスプレイは次のように変わります。



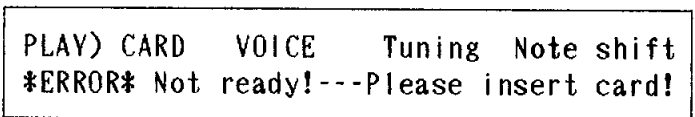
3. ディスプレイの下の+、-キーで音色を切り換えます。



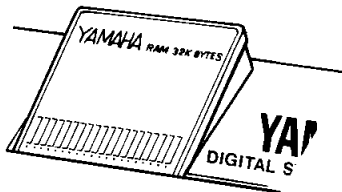
この例ではカード音色の48番の「Violin 2」という音色が選ばれています。

テンキーで2ケタの数値を指定しても音色を変えられます。

* カードが正確に入っていないときにはディスプレイは次のようになります。



EOSの電源を切ってから、カードを正しく差し込んでください。



弾き方で音量と音色を変えよう!!

イニシャルタッチ

弾き方で音量と音色を変えるといっても難しいことはありません。

鍵盤を強く弾けば、それだけ大きな音量で、弱く弾けば小さな音量になります。

一般的に楽器の音は、同じ音でも音量が大きいほど硬く鋭い音になり、音量が小さいと柔らかく丸い音になります。EOSシンセサイザーも鍵盤を弾く強さによって、音量と同時に音色も微妙に変化します。



柔らかく小さな音量
そっと弾く

大きな音量硬く鋭い
強く弾く

鍵盤を弾く強さを、イニシャルタッチ（最初の弾き方）といいます。

＊プリセット音色の中には、音量変化のない音色もあります。

変化の量は後から自由に変更できます。「音色の細かな変更（応用編）」

楽器らしさを出そう!!

ピッチベンドホイールとモジュレーションホイール

プリセットの100音色はいかがでしたか？ ピアノやオルガンなどの鍵盤楽器から、バイオリンやチェロ、ギターなどの弦楽器やフルート、サックス、トロンボーンといった管楽器、そしてシンセサイザーならではの音色、さらには効果音までリアルな音色がたくさんありましたね。

でも、本物のギターやバイオリンと音は似ているけどチョット雰囲気、という人もいるかも知れませんね。良いところに気がつきました。



ピアノやオルガンもそうですが鍵盤楽器と、ギターやベース、トランペットなどの弦楽器や管楽器とは大きなちがいがあります。鍵盤楽器はその名の通り鍵盤で音の高さが決まります。ですから音の高さは半音単位です。つまり、「ド」の上は「ド#（シャープ）」その上は「レ」といった具合です。

一方、ギターやバイオリンなどは、半音と半音のあいだの音程も出すことができます。また、ビブラートといって音程を微妙にゆらすこともできます。人間の声（歌）も伸びる音の後半で音程をゆらします。実力派のプロ歌手の歌をよく聴いてみてください。決して一本調子ではないはずですよ。

このように、本物の楽器では、微妙な音程で演奏したり、ビブラートをつけたりするため、EOSの鍵盤で弾くと何となく一本調子になってしまいます。

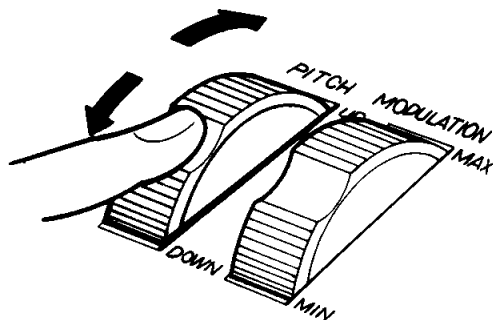
でも、安心してください。

EOSは、微妙な音程を出したり、ビブラートをつけたりするために「ピッチベンドホイール」と「モジュレーションホイール」の2つのコントローラを持っています。

ピッチベンドホイールとモジュレーションホイールを使えば、リアルな音色に豊かな表現をつけることができます。

ピッチベンドホイール

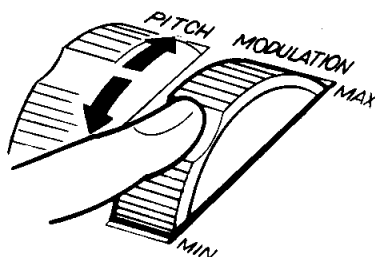
鍵盤を弾きながらピッチベンドホイールを動かせば音程を上下させることができます。



上に動かすと音程が高くなり、下へ動かすと音程が下がります。
このホイールは、手をはなすと中央の定位置にもどり、正しい音程にもどります。
ホイールを動かすだけですから、簡単にギターのチョーキング演奏も表現できます。
プリセット音色の09番で和音を弾いてピッチベンドホイールを動かせば、もうヘビメタです！
音程の変化幅は音色ごとに決まっていますが、自由に変更できます（「コントロールの設定」(応用編)）。

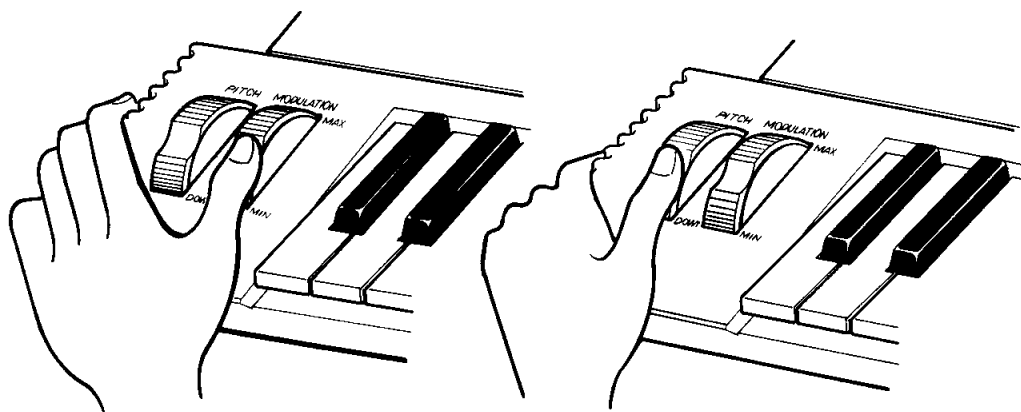
モジュレーションホイール

モジュレーションホイールを動かしてビブラート効果をつけることができます。
このホイールを上へ動かすほど効果が深くなります。下いっぱいには動かすと効果はなくなります。
モジュレーションホイールは手を離しても、その位置で止まったままです。ビブラートをかけたくないときには、くぼみの部分を一番下の位置にしておきます。

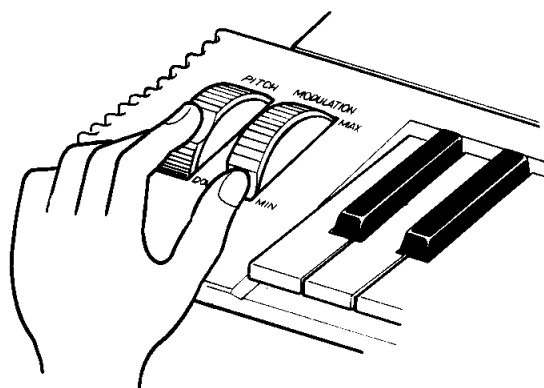


メロディーの伸びるところでビブラートをつける（モジュレーションホイールを上へ動かす）と効果的です。ただし、あまり頻繁に使うとイヤミになりますから、適度にかけてください。
モジュレーションホイールは、ビブラート（音程のゆれ）の他に、トレモロ（音量のゆれ）、ワウ（音色のゆれ）をつけることができます。
音色ごとに、ビブラート、トレモロ、ワウのうちどの効果がつか決められています。また、プリセット音色にはピアノのように何も効果がつかない音色もあります。効果は自由に変えることができます。（「コントロールの設定」(応用編)）

ピッチベンドホイールとモジュレーションホイールは通常左手で操作します。
操作する指は特に決められていません。みなさんが使いやすいように操作してください。参考までに代表的な操作方法を紹介します。



親指でピッチベンドホイールとモジュレーションホイールを操作します。
手のひらはホイールの下に置きます。



ひと差し指でピッチベンドホイール、親指でモジュレーションホイールを操作します。

どちらの場合も、両手で演奏しないときには、いつも左手をホイールにかけておくと良いでしょう。

チューニングと移調

EOSだけで演奏するときはあまり気にしなくてもよいのですが、他の楽器とアンサンブル演奏（合奏）をしたり、好きなレコードに合わせて演奏するときには、チューニング（音程を合わせる操作）が必要です。

また、歌の伴奏などで、音程（キー）が高すぎて声が出ない、音程（キー）が低すぎて歌いづらいときなどは移調します。またシャープ（＃）やフラット（♭）が多いむずかしい譜面も移調して弾けば簡単です。

EOSはデジタルシンセサイザーですから、チューニングや移調が簡単にできます。

チューニング

PRESET、USER、CARDが押されている状態（つまり音色の呼び出しのとき）ならいつでもチューニングできます。

右から2つ目の＋、－キーを押してチューニングを決めます。

PLAY) PRESET VOICE		Tuning	Note shift
No.11	Synstring2	+00	+00
△ －	△ ＋	△ －	△ ＋
△ －	△ ＋	▲ －	▲ ＋
△ －	△ ＋	△ －	△ ＋

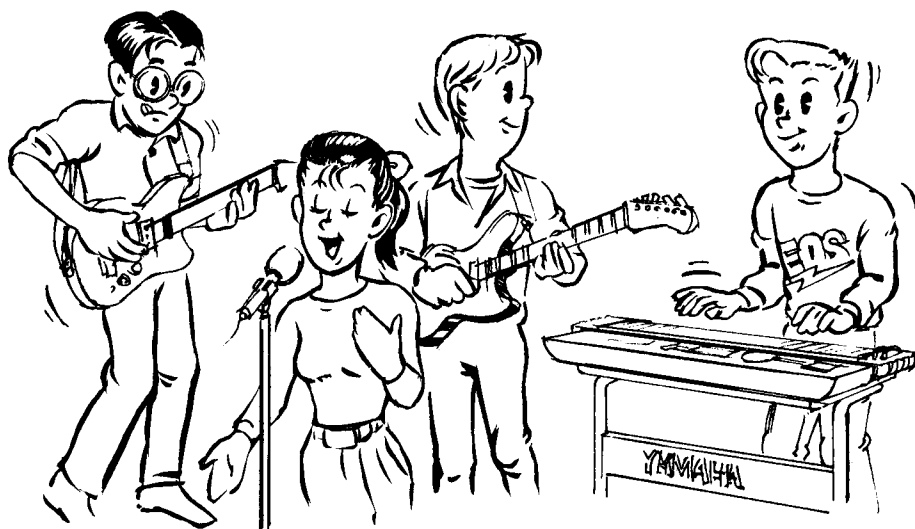
通常は+00にしておきます。この状態で中央のラが440Hzの高さで標準的な音程です。

＋を押すと音程が全体的に高くなります。最高は+63です。

－を押すと音程が全体的に低くなります。最低は－64です。

+00を中心にして上下に約3/4音変化します。

テンキーではチューニングできません。



移調（ノートシフト）

PRESET、USER、CARDが押されている状態（つまり音色の呼び出しのとき）ならいつでも移調できます。

PLAY)	PRESET VOICE	Tuning	Note shift
No.11	Synstring2	+00	+00



一番右の+、-キーを押して移調します。

通常は+00にしておきます。移調は半音単位で行ないます。数字1が半音になります。

+を押すと、半音ずつ全体的に音程が上がります。最高で+24です。

-を押すと、半音ずつ全体的に音程が下がります。最低で-24です。

上下それぞれ2オクターブまで変化します。

例えばキーが高過ぎて歌えないとき、半音下げるなら-1、1音下げるなら-2を指定します。

7で5度、12で1オクターブ、24で2オクターブです。

またシャープ（#）やフラット（b）が多くてむずかしい譜面も移調して演奏すれば簡単です。

PLAY)	PRESET VOICE	Tuning	Note shift
No.11	Synstring2	+00	+00



PLAY)	PRESET VOICE	Tuning	Note shift
No.11	Synstring2	+00	-05



テンキーで移調することはできません。

*EOSでは実際に発音できる音程が決まっています。移調（ノートシフト）の設定で、発音できる音域を超える場合には、音程が折り返すこともあります。

今流行りのウラ技

マニュアルに書いてあるからウラ技じゃないけど知っている便利な機能を紹介しましょう！

音色呼び出しのウラ技集



その①

なんでもテンキーという人へ！

テンキー部の+、-キーでも音色を選べます。

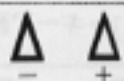
その②

10の位固定モード、やはりテンキー派の君へ！

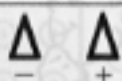
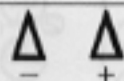
左から2番目の+、-キーを同時に押すと音色番号の10の位が固定されます。テンキーで10種類の音色がダイレクトにワンタッチで呼び出せます。

例えば今、25番の音色が選ばれているとします。

PLAY)	PRESET	VOICE	Tuning	Note shift
No.25	Syn	Ensemble	+00	+00



同時に押す。



音色名の下の+、-キーを、同時に押します。

これで10の位が20に固定されます。

テンキーで0~9を押せば20~29番の音色をワンタッチで呼び出せます。

例えばテンキーの2を押せば22番の音色が、5を押せば25番の音色が呼び出せます。

固定を解除するには、一番左の+-キーを押します。あるいはPRESET、USER、CARDのいずれかを押しても解除できます。また音色名の下の+、-キーを同時に押しても解除できます。

その③

1音色じゃ物足りないというぜいたくなキーボードリストに。

2つの音色を同時に呼び出します。

いままで紹介したのは、1音色ずつの呼び出しでした。

EOSでは鍵盤を2つに分けて、高音部と低音部で別々の音色を演奏することが出来ます。左手でベース、右手でピアノの音色を弾くことが出来ます。

操作は1音色の呼び出しに比べればチョット複雑です。

でもいち早く確かめたい人は「スプリット演奏」(応用編)をご覧ください。

その④

2つといわず8音色もできるゾ！！

ベースとピアノといった2音色の同時演奏で感心してばかりはいられません。EOSでは何と8音色を同時に呼び出すこともできるのです。J出口側同8音色Sでも同時8音色ともなると操作が複雑です。そうは言ってもとにかくやってみないと気がすまないという人は、「マルチモード」(応用編)をどうぞ！！

その⑤

最後のカクシ技、デモソング！！

EOSのプリセット100音色を使った演奏データが入っています。これを聴けばEOSにどんな音が入っているのか、使いこなすとどんなことができるのか、ハッキリわかります。

プロのマニピュレーターがEOSのために夜も寝ずに昼間寝て作曲、演奏した超大作！！デモソングってどこにあるんだ？存在を知ったからには早く聴いて楽しみたい君、今すぐ37ページへ進め！！ Let's go！！

この章のまとめ

- [1] 接続はEOSの出力端子OUTPUTとアンプの入力端子LINE IN(AUX IN)をケーブルでつなぎます。
アンプはキーボードアンプが最適です(14 ページ)。
夜間の練習はヘッドホンでどうぞ。

- [2] EOSはプリセット100音色、ユーザー100音色、カード100音色の合わせて300音色をすぐに呼び出せます。(24 ページ)

- ①「プリセット」、「ユーザー」、「カード」のいずれかを選択します。

お買い上げの時点では、プリセット音色と同じ音色が入っています。
カード音色を選ぶためには、カードをカード挿入口に差し込んでおきます。

- ②ディスプレイの下に+、-キーで音色を選びます。

またはテンキーで音色番号を2ケタの数字で指定します。

- [3] 鍵盤を弾く強さで音量や音色が変化します(29 ページ)。

- [4] ピッチベンドホイールで音程を微妙にコントロールして楽器らしさを出せます(31 ページ)。

- [5] モジュレーションホイールでビブラート(音程のゆれ)、トレモロ(音量のゆれ)、ワウ(音色のゆれ)をつけて、うたごころを表現できます(31 ページ)。

- [6] 演奏中はいつでもチューニングできます。
合奏のときは他の楽器としっかりチューニングしましょう(33 ページ)。

- [7] 移調もいつでもワンタッチでOK。
演奏するキー(調)をすぐに変えられます(34 ページ)。伴奏や転調に便利です。



自分だけのオリジナル音色を作りたい人は第3章「音色のエディットに挑戦」
デモ演奏を聴いてみたい人は37 ページ。
色々な音色をじっくり確認したい人は90 ページの「プリセット音色一覧」
2音色、8音色を同時に出してみたい人は応用編に進んでください。

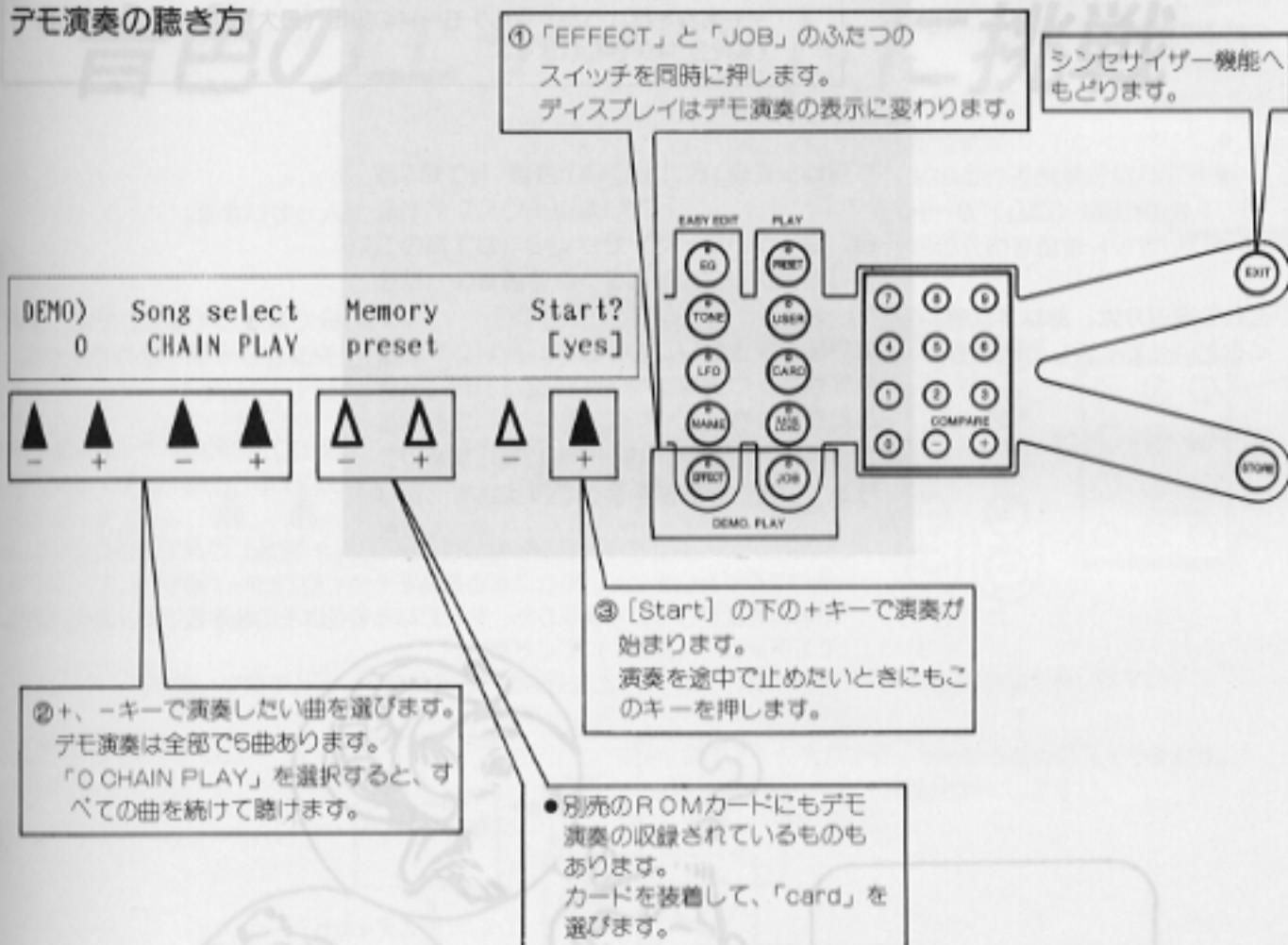
今日はこの辺にして、続きは明日という人は、アンプ、EOSの順に電源をオフにしてください。お疲れさまでした。

デモ演奏を聴いてみよう

EOSの機能を最大限に活用したデモンストレーション演奏が収録されています。

プリセット音色にはどんな音色が入っているのか、EOSでどんなことができるのかをすぐに体験できます。

デモ演奏の聴き方



EXITスイッチを押せば、シンセサイザーの機能の「音色の呼び出し」の表示にもどります。

デモンストレーション一覧表

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 0 | CHAIN PLAY | 1から5の5曲を続けて演奏します。 |
| 1 | Opening | |
| 2 | SLAV | |
| 3 | Stomp | |
| 4 | Nut | |
| 5 | Funky City | |

注意

- ・「Stomp」はディストーションというエフェクトを使用して音をひずませてあります。
音が割れたように聞こえますが故障ではありません。
- ・デモ演奏中は、鍵盤を弾いても音は出ません。
またモジュレーションホイールやピッチベンドホイールを操作しても効果はありません。
- ・デモ演奏は特殊な機能です。EOS単体ではデモ演奏のように自分で曲を録音して自動演奏させることはできません。
QX5などのシーケンサーが別に必要です。
- ・デモ演奏を行なうと、マルチモードの設定（最大発音数や音色の割り振りなど）は失なわれます。